

発達障害児の家族への支援に関する研究

—LD 児等発達障害児・者の親の会に所属している家族を対象とした調査をとおして—

金尾 靖子

I 問題

特殊教育から特別支援教育への転換とともに、LD 児や ADHD 児、高機能自閉症児、つまり、発達障害がある子どもたちに対する教育へより関心が高まってきた。その子どもたちの親は、子どもの障害に突然直面するというよりは、子どもが育っていく経過の中で、親が発達の遅れを気にするようになる。しかし、そのような子どもたちは、明らかに異常というわけでもなく人並み以上にできることもあったりする。親は、わが子とどのように向き合えばよいか見通しが立たない状態のなか、不安を抱え模索しながら日々過ごすこととなる。

そこで、嶋(1992)は、ソーシャルサポートが十分にあれば、大きなストレスや危機状況に遭遇しても病的状態に陥らずに済み、また、障害児の母親に対するソーシャルサポートは、ストレスを軽減し、精神的健康や障害受容を高める効果があると指摘している。

このような、ソーシャルサポートの一環として、親の会が考えられる。現在では、多種多様の親の会が存在する。小室・前田・長崎・朝比・加賀・遠藤・根本・中村・大田・大槻(2003)の研究でも親の会は注目されている。親の会からの情報を必要としている保護者がたくさんいる中で、親の会の問題も存在する。たとえば、嶋(1998)は、乳幼児期の子どもを持ち、また、障害の認識において不安を抱える若年層の親たちにとって参加しにくい団体となっていると報告している。

以上のことから、親の会が家族の中でどのような役割となっているのか明らかにする必要がある。

II 目的

本研究では、LD 児等発達障害児・者の親の会

に所属している家族を対象に質問紙調査を行い、親の会参加者の実態を明らかにする。そして、親の会の活動をとおして、家族にどんなよい効果が、家族支援となっているかを明らかにする。

III 方法

1 調査対象

N 県内の LD 親の会(以下、「親の会」とする)に所属する父親と母親(280 組)

2 調査内容

第1部 子どもと両親のプロフィール

第2部 父親用 第3部 母親用

1) 親の会について

「親の会を知ったきっかけ」

「親の会入会時に希望したこと」

「よかったことや改善されたこと」

「参加したことのある活動とそこで感じたこと」

「今後親の会へ期待すること」

2) 親の会以外について

「相談する相手」

「必要な情報」

3 親の会代表への面接調査

1) 入会前後に希望したこと

2) 父親の参加

3) 若年層の参加

IV 結果と考察

280 組の郵送に対し、107 組(父親用 60 部、母親用 107 部)より回答を得て、回収率は 38.2%であった。

LD 親の会に所属する家族の子どもは、男の子 88 名(82.1%)、女の子 17 名(15.9%)であり、それぞれの平均年齢は、14.3 歳 13.1 歳であった。また所属については、「小学校」が最も多く 28 名(26.2%)、

次いで「中学校」24名(22.4%)、「高等学校」22名(20.6%)であった。

「親の会入会時に希望したこと」(図1)で、「情報が得られると思った」が全体で88.6%、「他の親と話すことで気持ちを共有したかった」が全体で77.9%、「相談できる人がほしかった」が全体で79.6%、「勉強できる」が全体で80.2%、「不安な思いを取り除けると思った」が全体で74.3%、「いろいろな人と知り合い出会えると思った」が全体で74.9%であり、新しい情報を求めたり、勉強を希望したり、同じような障害のある子どもがいる親との出会いを求めて入会していることがわかる。つまり、情報や相談する人が少なく、不安に思っていたり、もっと勉強しなくてはと考えている親が多く、そのようなことが解決できそうな場として親の会が期待されているということがいえる。

また、「親の会に入会したことによって、よかったことや改善されたこと」で回答を求めたところ、「同じ悩みを持つ人に出会えた」が全体で73.7%と高い結果となっており、入会時に希望していたことが叶ったといえる。しかし、「さまざまな情報が得られた」では、母親が90.1%と高い結果に対し、父親は58.3%で母親との差が大きかった。これは、父親が親の会への参加が少ない、または、参加していないことが影響していると考えられる。他に情報を得る提供の場として、「参加したところのある活動」の中の「講演会」「事例検討会」「例会」がある。そこで、「情報を得ることができる」(図2)との回答は、全体的にみて「講演会」が68.8%、「例会」が44.3%、「事例検討会」が40.7%であ

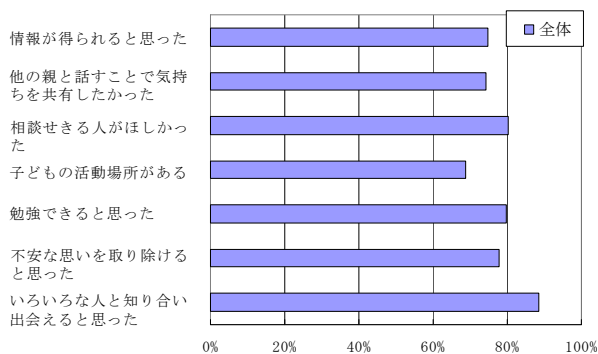


図1 親の会入会時に希望したこと

り、「講演会」が最も活動の中で多くの会員が参加し、情報を得ていることがわかった。このような点からは、情報収集や同じ悩みをもつ人との出会いができ、不安を減少させることができる。

さらに、「今後親の会へ期待すること」で自由記述の回答を求めたところ、ここでも「情報がほしい」との回答が多くあった。しかし、項目にはなかった「結婚や男女交際について」や「体験談が聞きたい」という回答があった。これは、「事例検討会」でも聞くことができるが、仕事が忙しかったり等で参加できないために、「地元での活動をしてほしい」との回答もみられ、実現することができれば、今以上に参加者が増えることが予想できる。他に「いろいろな機関との連携」という回答も多く、やはり行政や福祉、就職等さまざまな情報を求めていることが明らかになった。これは、親の会だけでなく、さまざまな機関との連携や支えを望んでいることがわかる。このように、親の会は重要な情報源として機能しており、参加者にとって重要な社会資源の一つになりつつある(小室・前田・長崎・朝比・加賀・遠藤・根本・中村・大田・大槻, 2003)といわれているが、価値観が多様化した今日、親の会に求められる役割は漠然とした画一的な要求運動型から、個別の問題を共有しその開放へと向かうセルフヘルプグループ(Self Help Group: 以下 SHG)としての機能により重心が移動してきた(嶋崎, 1998)と考える。

また、今回の研究で3年未満の会員と3年以上の会員を比べたところ、母親のみにおいて、入会してよかったことや改善されたことで、「親の仲間作り」「前向きになれた」「子どもの障害に対する正しい知識が増えた」「自分の意見を言えるように

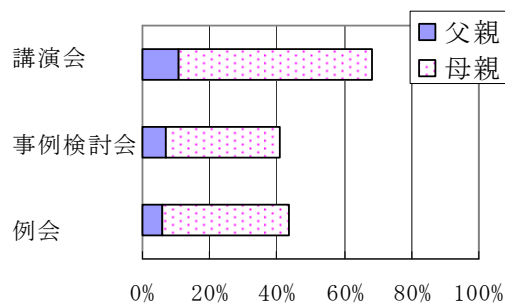


図2 情報を得ることのできる活動

なった」「子どもを見る視点が変わってきた」に有意差や有意傾向がみられた。これらより、特に母親にとっては、親の会が家族支援となっているといえるのではないかと考える。

一方、父親は回答が母親の回答に比べ少ないこと、また、父親の回答のなかで「参加していない」との回答が多く、「無回答」が母親に比べて多いことがわかった。参加できない理由として、父親は仕事が忙しいため(42.9%)が最も多かった。松本(2001)は、夫婦で親の会に参加することは、配偶者を理解しようとする姿勢が促進するとしている。さらに、SHG機能は家族内他者(配偶者と子ども)とのかかわりにまで及んでいることを明らかにしている。これより、父親の参加は大切であるが、さまざまな親の会がある中で、ほとんどが母親中心の会で女性一色である。そこに、父親が参加することは難しいであろう。また、母親の自由記述より「土日に活動してほしい」との回答が複数あった。活動は平日が中心であるため、父親は当然仕事で会への参加が難しい。さらに、自由記述より「親の会に妻が入会しており、父親は留守番(家事)」という形でかかわっているや「父親は親の会に入っていないが、情報は伝えている」という母親の回答が複数みられた。これらより、実際に父親は親の会に直接参加することが少ない、もしくは不参加であるが、間接的に参加しているといえるのではないだろうか。

これより、父親が直接参加をしなくても母親と協力し合えば、子どもを含め、家族全体の心理面のサポートとなり、家族支援につながると考える。

最後に親の会以外のつながりについて述べる。

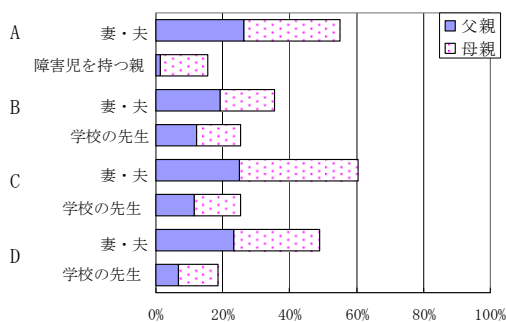


図3 相談する相手の順番

「A子育てについて」「B学校での子どもの様子について」「C子どもの将来について」「D子どもに対する周囲の人の理解について」で一番に相談する相手は、妻・夫が最も多かった(図3)。このことより、家族内で解決することが多いといえる。これは、自分たちの子どものことだからという意思と、一方で周りに話していないので、身内で相談するという意見とが考えられる。

V 今後の課題

親の会への父親の参加のあり方は家族を支える上で重要である。夫婦揃っての親の会への参加、また、父親と子のみの参加、父親のみの参加が必要であると考えられるが、間接的な参加にも重要性は高いといえる。今後は、母親から父親に情報の伝え方の有効性を考える必要がある。

そして、親の会以外の諸機関との連携も重要であり、その情報を得たいと希望する人が複数みられた。このことより、諸機関からの情報を身近な本や冊子等で情報を得ていくことも必要があると思う。さらに、親の会に入会していない人たちへの情報提供やサポートについての検討が必要であると考えられる。

文献

- 小室佳文・前田和子・長崎多恵子・朝比奈政子・加賀淑子・遠藤亜紀・根本哲広・中村洋一・大田仁史・大槻解子(2003)〈報告〉障害を持つ子どもの家族への支援：医療・保健・福祉・教育に関する情報提供方法の検討. 茨城県立医療大学紀要, 8, 99-108.
- 松本訓枝(2001)「不登校」児家族の変容とセルフヘルプ・グループの役割(第1報)－「親の会」参加後の子どもと親の実態－. 生活指導研究, 18, 138-157.
- 嶋信宏(1992)大学生におけるソーシャルサポートの日常的ストレスに対する効果. 社会心理学研究, 7(1), 45-53.
- 嶋崎理佐子(1998)家族援助における親の会の役割—歴史的变化に応じた援助システムの展望—. 発達障害研究, 20(1), 35-44.